AY2020 Center for Inclusive Leadership（CIL）
Pedagogy Research and Event Subsidy

研究代表者 Research Representative	所属・職位 Affiliation/Position	言語教育センター 特任講師	氏名 Name	JUNG Jonghee
研究課題名 Research Title	(日) UDL 理論に基づくインクルーシブ授業の開発に関する事例研究: 立命館アジア太平洋大学の1回生演習科目と必修言語科目を対象に (英) A case study of inclusive class development based on UDL concept: Improving the 1st year seminar and mandatory language subjects at Ritsumeikan Asia Pacific University			

研究メンバー Research Group Members	氏名 Name	所属 Affiliation	職位 Position
	住田環	立命館アジア太平洋大学（言語教育センター）	准教授
	ベルガー舞子	立命館アジア太平洋大学（言語教育センター）	准教授
	立山博邦	立命館アジア太平洋大学（学修支援センター）	准教授
	筒井久美子	立命館アジア太平洋大学（学修支援センター）	准教授
	納富恵子	福岡教育大学	教授

2020 年度 研究経過（研究経過・到達点を明確にご記入ください。800～1,000 字）
AY2020 Research Progress (Please state clearly the research progress, results, approx. 400 words.)

※学会・セミナー参加

国内の高等教育の現場等のインクルーシブ教育システム構築の現状と課題を検討し、インクルーシブ教育の課題、評価など、関連分野の動向を確認した。学会・セミナーに参加したメンバーは、毎回の学会・セミナー後に研究メンバーに対して学会・セミナーの内容を事後報告し、メンバー間でディスカッションを行った。学会・セミナー参加の詳細は下記の通りである。

2020 年 12 月 6 日　　英語教育ユニバーサルデザイン研究学会 研究大会
参加者：ベルガー舞子

＜学会・セミナー参加報告＞

英語教育におけるユニバーサルデザインに関して、シンポジウムおよび研究発表が 10 件行われた。研究発表はオンデマンド形式で全て聴講した。

シンポジウム 入山満恵子・加藤茂夫 (新潟大学) 谷川美記子 (新潟市立鏡淵小学校)

小学校で英語が教科化されたいま、「教師に求められることってなに？」、「多様な特性を持つ子どもたちを含めた、全ての子どもたちが英語にアクセスできるようにしたい！そのために将来教職を目指す学生はどんなことを学び、準備したらいいの？」そんな問いについて考えるためのシンポジウムであった。英語教育の視点、特別支援の視点、そして現場の実践の視点から話題提供し、新学習指導要領に対応しつつ教員養成課程において求められること、必要とされることについて検討された。日本は米国に比べ LD の大学生が少ないが、これは、英語ができないために進学できていない可能性がある。小学校現場は授業を乗り切ることに精一杯で英語を楽しめる・身に着けるようになっていない。その他有益な文献等が紹介された。

発表①発音口形を「見る」傾聴姿勢と明示的英語音声指導の効果 聴覚障害学級から通常学級への長期的指導連携の取組み」 河合裕美 (神田外語大学)

通常学級で学ぶ聴覚障害児童は年々増加しており，英語教科化前に合理的配慮や指導の手立てを講じることが急務であった。千葉県内聴覚障害特別支援学級で個別取り出し英語音声指導を実践し，事前・事後で英語能力テストを実施した。教師の発音の口形模倣と注視を徹底させる「見る」音素認識指導の結果，児童の傾聴姿勢に変化が見られ，英語音素の知覚・産出能力が向上し，教師の指導能力や指導への意識にも変容が見られた。この指導法を通常学級外国語授業に応用し，5 学年児童 100 名に明示的な音声指導を行った。発音指導の際に教師の口形を一斉に「見る」ことで教室の騒音値を下げ，聞こえづらい摩擦音などの音素を教室内のどの地点からも聞こえる環境づくりを行った。聴覚障害学級担任と通常学級担任は指導計画を共有し，指導連携体制の中で支援を必要とする児童に配慮した指導を行った。その結果，児童の(1)発話者の口形への注視時間，(2)英語能力（音韻認識・音素産出能力），(3)英語学習に対する意識が事前より事後で向上した。聞こえが低い聴覚障害児童の「見る」傾聴姿勢は，通常学級の全ての児童にとっても重要な英語学習方略であることが明らかとなった。

発表② COVID-19 下における言語学習障害（LLD）と その英語学習支援 貝原 千馨枝/ 柴田 邦臣 (津田塾大学)

本研究の目的は、COVID-19 下で英語を学ぶ際に障害のある児童・生徒へのサポートの必要性を主張することにある。これまでその困難は、ディスレクシアの児童・生徒を中心に論じられてきた。しかし実際には、点字や手話等の教材の少なさにより言葉の学びへのアクセスが制限されている、視覚障害やろう・難聴の児童・生徒などを含む、より広範囲の問題といいうるのではないか。2020 年度の小学校外国語教科化に象徴されるように、グローバル化による英語教育の加速は、言葉を学ぶ際に障害のある児童・生徒

も、英語力による評価に巻き込んでいる。本研究では、英語を学ぶ際の障害を「言語学習障害 Language Learning Disabilities：LLD」と捉え直し、社会的課題として把握してきた。その傾向は、COVID-19 下の休校によって強められている。これまで対面による丁寧な学びを積み重ねてきた障害のある児童・生徒にとって、長期休校はまさに「学びの危機」であった。2020 年に現出したのは、LLD の子どもたちの学びの機会の喪失だけでなく、急速なオンライン化・EdTech 化が、格差をさらに助長しているという克服し難い状況である。

発表③支援の必要な生徒へのスパイラルな指導_武田富仁 (桐生市立商業高等学校定時制)

支援が必要な生徒に限らず、既習事項の定着を図るためには、スパイラルな形で何度も言語材料に触れることが必要。発表者は生徒の特性を理解し、定着を図るためには、どのような指導が適切であるかを提示した。例えば、スモールステップで学習意欲を醸成するにはどのような授業展開が考えらえるか。生徒の興味関心に応じて、作品作りなども効果的。教員のちょっとした心がけで生徒の取り組みが変わってくる。キーワードとして、生徒に「ながら作業」はさせない、聴覚情報の整理、情報の視覚化、指示を具体的になど、生徒の特性に応じて配慮できることは多い。

発表④まだ間に合う？ 高校英語授業での UD 実践_齋藤理一郎 (群馬県立太田フレックス高等学校)

本発表では、学習面で様々な課題を抱えながら高校進学してきた生徒たちを「いかに苦手な学習に取り組ませるか・いかに自分の学力の現状と向き合わせるか」の授業実践を報告する。 小学校で外国語活動が始まり、さらに英語が教科化した今、英語の読み書きが苦手な子どもたちに対する支援も早期化、低年齢化が進んでいる。支援の手段についても、音韻認識や視機能、協調運動など、トレーニングの数々が蓄積されている。それぞれの支援によって、自分自身の学習スタイルを確立した子どもたちの事例を成果として見聞きすることも増えた。問題は、何らかの事情で、そういった支援に巡り合うことがないまま義務教育を終え、高校進学してきた生徒たちの学習姿勢である。高校の教室は、学習が苦手なことによる自己肯定感の低い生徒と、逆に苦手な学習に向き合えずに居直る生徒が混在している。

発表⑤学習者の特性に最大限向き合った成果事例報告_前川未知雄 (LLD 外語学院)

本発表者は、一般的な英語学習者とは明らかに違う困難を抱えた受講生をサポートする上で、臨床心理士・ディスレクシア専門家・大学教授などのサポートも活用し、通常の学習者とは異なる個別教材・指導法を実践し成果を上げてきた。本発表ではその実践報告を行い、困難を抱えた学習者を効果的にサポートする上で普遍化できると考えられるポイントを 2 点に、また今後の検討課題を 1 点に集約し発表を行う。本発表の中心となる事例は 50 代後半の男性で、学習開始時は TOEIC240 点であった。他学習者と比べて上達のスピードが明らかに遅く、レッスン受講中にディスレクシアであると正式に診断が下ったが、約 1 年半の指導の結果、勤務先で要求されていた海外赴任基準点（TOEIC640 点 ※実施団体の特例処置として制限時間延長措置有）を達成した。指導においては、①学習者の癖を反映したオリジナル教材作成 ②約 60 日間の連続レッスンなど極端な反復練習に一定の効果があったと考えられる。

発表⑥学びのユニバーサルデザイン（UDL）を活用した通常学級の英語授業における支援と課題_大谷みどり (島根大学)

通常学級の英語授業において、様々な特性を持つ子どもたちに、どのような支援・工夫が出来るか、個別や取り出しではない状況で、学びのユニバーサルデザイン（UDL）の枠組みを参考にしながら取り組んだ小学校外国語、単元を通しての中学校英語の授業をもとに、UDL の「取り組み」「提示」「行動と表出」(バーンズ亀山, 2018)におけるオプションの工夫（支援）と、支援の背景にある児童生徒の特性、そして支援を提示する際の課題等について考察した。具体的なオプションとして、小学校での異なった素材を使ったアルファベット文字の提示や、中学校での板書の工夫、書くことが苦手な中学生への iPad を使っての語順指導、ワークシートの選択肢等、取り組んだ児童生徒の様子と学びとともに、支援の観点を含めた指導案の工夫（しまふシート）についても紹介された。

発表⑦ディスレクシアの生徒へのフォニックス指導_藤堂栄子 (NPO エッジ)

NPO 法人エッジではディスレクシアと診断されている小学校高学年の生徒にジョリーフォニックスを使用してフォニックス指導を行っている。 3 月、7 月、12 月で各 3 日をかけてグループ1から7の 42 音を指導している。ディスレクシアの特性に対してジョリーフォニックスが有効であった例を挙げて発表がなされた。

発表⑧フィンランドの外国語教員養成 質保証と個への配慮_淡路佳昌 (大東文化大学)

発表者は 2019 年 4 月から 1 年間、フィンランドのタンペレ大学客員研究員として、市内の基礎学校や高校での授業や、大学の教員養成課程を観察してきた。本発表では、そのうち外国語の教科担当免許のための教育実習に焦点を当て、フィンランドにおける教育実習の様子を紹介がされた。

発表⑨中学生の単語聴写課題の回答分析 ―音韻認識とデコーディング指導のプレ・ポスト比較_村上加代子 (甲南女子大学)

英単語の読み書きスキルは英語学習者にとっては最も基本的かつ必須のスキルであるが、多くの中学生が「英単語が覚えられない」ことを強く負担に感じている。そもそも読み書きにはその前提条件として複数の認知スキルの獲得が指摘されている。文字の形や音などの知識だけでなく、英語の音韻を正しく知覚・分析する力（音韻認識）や音声を文字に変換したり文字を音声化するスキルの獲得が基礎的な読み書きには欠かせない。本調査では、公立 A 中学校の 1 年生を対象に「音と文字の対応習得」を目的とするデコーディングと音韻認識指導を年間 20 本のオリジナルビデオ教材を用いて行った。指導プログラムの前と後に、①アルファベット聴写課題、②単音節単語の音素分解課題、③単音節単語の聴写課題を実施し、回答結果を比較した。さらに、単語聴写課題の総合得点の上位と下位 9%範囲の生徒を抽出し、実際のスペリング内容を8つのパタンに分類し、両群の誤答内容の質的差異を分析した。その結果、両群には回答に質的な違いがあること、そして両群ともに指導の前と後では誤りのパタンが変化していることが確認された。

発表⑩英語の読み書きと iPad の活用について_村田美和/中村賢治 (高崎健康福祉大学)

本研究では、公立中学校における英語の通常授業において、3年の全生徒が iPad を活用し、English 4 Skills 等を3カ月間活用した様子について報告する。本実践は、GIGA スクール構想による ICT の導入に先駆けて行われた実践であった。英語の読み書きに特化して、URAWSSII及び URAWSS-English を用いて対象生徒らの日本語及び英語の読み書きの力を測り、iPad や ICT 教材に対する意識等を分析した。

2020 年 12 月 13 日　第 7 回発達支援力アップデートセミナー
参加者：JUNG Jonghee

＜学会・セミナー参加報告＞

授業のユニバーサルデザイン化に関する二つの研究発表が行われた。

発表I「授業のユニバーサルデザインと合理的配慮」 阿部利彦　星槎大学教育実践研究科 教授

合理的配慮をユニバーサルデザイン化し、障害のあるなしに関わらず、どの子も自分にあったものを選択できる授業、選択しなくてもよい授業にするための取組に関して発表者から提案があった。学びにつまずきがある子供は、①注意・集中に課題があるため、着眼点を明確にし、刺激量を調整する必要がある。②ポイントをつかむのが苦手な子供に対しては、「何が大事か」を見つけやすくするために情報量や説明の時間を調整しなければならない。③つながりを見つけるのが苦手な子供に対しては、言葉だとイメージしにくいので、図にしたり、イラスト化し、視覚化することが効果的であると考えられる。また、④共通点を見つけることが苦手な子供、⑤学習意欲が低下しやすい子供に対しては、達成感・自己肯定感を大切し、本人へ直接支援した方がいいとされている。

発表II「担任外の立場から授業のユニバーサルデザインをどう支えるか」 前田智行 こども発達支援研究会

学校現場では、先生の統率力が及ばなくなることが多く、授業より面白いもの、刺激的なものを欲する子供たちによる暴言暴力・授業の停滞が続くと学級崩壊が問題視されている。子供の実態を把握するためのアセスメントを行うことが大事である。教師、保護者、地域環境の実態も調べる必要がある。一番の課題は、学習困難の子も含めて理解・参加できる授業にすること、つまり授業改善である。刺激のある授業、楽しい授業にすることが求められる。

2021 年 1 月 24 日　日本 LD 学会 第 4 回研究集会
参加者：住田環

＜学会・セミナー参加報告＞

午前中に基調講演1本、午後にシンポジウムが開催され、リアルタイム配信された。シンポジウムでは、5名の話題提供者の発表を踏まえ、議論が行われた。

【基調講演】「学ぶ・働く」の可能性を広げる環境整備や合理的配慮

障害のある児童生徒・学生が置かれている現状と課題、その課題の解決のために行うべきことについて、現場で様々な取り組みをされている東京大学先端科学技術研究センターの近藤武夫先生が講演をされた。課題として「精神・発達障害、病弱のある学生が、修学や就職に関し苦闘していることが顕著である」ことがあげられ、その背景として、修学に関しては、①「見えない障害」に対する柔軟な合理的配慮の提供に不慣れな大学の支援体制と、支援の活用に不慣れな障害学生、②画一的なカリキュラム、年齢（学年）で全員一斉に進級、卒業することを前提にカリキュラムが構成されてきた教育慣行の説明がなされた。また就職に関しては、在学中から就活をし、新卒一括採用を行うことを基礎とする日本型雇用慣行と、その慣行にマッチしない障害学生、という点から説明がなされた。 上記の課題解決の取り組みとして、「新しい働き方、学び方の創造」の観点から提言がなされ、障害の有無にとらわれないインクルーシブな活躍の場を作るための取り組みの具体例が紹介された。

【シンポジウム】合理的配慮の内容決定に至る建設的対話の在り方

①**「中学・高校における授業のバリアフリー化」**塩見 匠（京都府立晴明高等学校）1クラス 30 人編成で、一人1台タブレット端末を持ち、ICT を活用した教育活動を行なっている。障害を持った学生を含む様々なタイプの学生が在籍しているが、校内はバリアフリー、卒業を3年と限らず、3～5年で卒業することを目指し、学習サポート、社会的自立サポート、キャリアサポートを行なっている。

②**「学びの保障～高校と大学での合理的配慮について」**堀口 里奈（大学生）識字障害を持つ自身が高校で受け、また現在大学で受けている合理的配慮について紹介した。大学に支援室があって助けられていること、障害のある先輩などがいるコミュニティーの中で交流してきた経験などを語り、個々の障害に合う配慮が選択でき、その上で公平な成績評価があることが学びの保障のプラットホームであることを述べていた。

③**「大学における合理的配慮」**ピーター・バーニック（長崎大学）話題提供者の勤務先で、どのような合意的配慮が行われているのかという具体例と、学生支援にあたっての課題について発表がなされた。

④**「学ぶこと・働くこと～社会で生活すること」**アスカ（社会人）・日下部 貴史（富山大学）大学在学中に発達障害の診断を受けたアスカさんと、アスカさんの就職支援を行い、卒業後もフォローアップ支援を行なってきた大学スタッフの体験談が語られた。企業の、障害を持った人に対する理解がまだまだ不足しており、大学を送り出した後も、サポートが必要なことが多いという日本社会の現状の報告があった。多様な働き方、多様なキャリア構築が認められるような、インクルーシブな社会のあり方について考えさせられた。

※勉強会の開催

2020 年 10 月から 2021 年 2 月まで、計 4 回の勉強会を開催した。研究メンバー間で知識を共有し、ディスカッションを行った。勉強会の詳細は下記の通りである。

	(日付)	(勉強会の内容)
第 1 回目	2020 年 10 月 13 日	学びのユニバーサルデザインの概念について、今後の研究計画について
第 2 回目	2020 年 11 月 17 日	大学における学びのユニバーサルデザイン、秋セメスターの担当授業の状況について

第 3 回目	2020 年 12 月 22 日	学びのユニバーサルデザインを取り入れた授業の事例、 学習者の「達成」と「意欲」について、 英語教育ユニバーサルデザイン研究学会研究大会参加報告、第 7 回発達支援力アップデートセミナー参加報告
第 4 回目	2021 年 2 月 18 日	学びのユニバーサルデザイン・ガイドラインの紹介と APU 初年次教育の現状について、 今後の研究計画について、 日本 LD 学会 第 4 回研究集会参加報告

2020 年度中の研究発表（予定を含めてご記入ください）
Publication of Research in AY2020 (journal articles, conferences, etc.) (Please include future plans as well)

発表方法 Publication Methods	詳細 Details		
著書・論文等 Books or Articles	著書・論文名等 Title of Books or Articles	出版社／掲載誌・巻号等 Name of Publisher / Name and Volume of Journal	刊行年月日 Date of Publication
	鄭鍾熙「ICT を活用した韓国語反転授業の実践：インクルーシブ教育の観点から」	日本韓国語教育学会／ 韓国語教育研究 10	2020/9/15
	JUNG Jonghee「Moving Towards an Inclusive Classroom in Korean as a Foreign Language Education: A Qualitative, In-depth Interview Study」	日本韓国語教育学会／ 韓国語教育研究 10	2020/9/15
	立山博邦・カッティング美紀・筒井久美子「「With コロナ」時代における初年次セミナーのあり方：立命館アジア太平洋大学における実践の結果を踏まえて」	立命館高等教育研究 21 号	2021/3/31
学会等 Presentation at an Academic Conference	タイトル Title	学会名 Name of an Academic Conference	発表年月日 Date of Presentation
	UDL 理論に基づく韓国語授業の実践：ICT を活用した遠隔授業	The 18th Asia Pacific Conference	2020/11/14
	大学におけるインクルーシブ韓国語授業の実現：授業の UDL 化を目指して	第 2 回 APLJ シンポジウム	2020/12/2
	オンライン授業における多文化協働学習の可能性(実践報告)	第 27 回 JCA 九州支部大会	2020/3/20

その他 Others			

2020 年度 開催イベント（予定を含めてご記入ください）
Events in AY2020 (Please include future plans as well)

	イベントタイトル Title of Events	イベント詳細 Event Description	開催年月日 Date of Event
イベント Event			

2021 年度 研究計画（800～1,000 字）
Research Plan for AY2021 (Please state clearly the research progress, results, approx. 400 words.)

※今後の計画

- 第 5 回目 勉強会（2021 年 4 月 6 日を予定）

第 5 回目の勉強会では、学びのユニバーサルデザイン・ガイドラインに沿った授業の振り返りを行う予定である。初年次科目として、スタディスキル・アカデミックライティング（SSAW）を、言語科目として日本語 1 科目、英語 1 科目、AP 言語 1 科目の現状を確認する。2021 年度春セメスター中に実施予定のパイロットテスト設計に向けて、知識を共有し、意見交換を行う。

- 学会・セミナー参加

国内の高等教育の現場等のインクルーシブ教育システム構築の現状と課題を検討、インクルーシブ教育システム構築の動向、課題、評価の取組を検討する。

参加予定の学会・セミナーは以下の通りである。

2021 年 12 月 10 日～12 日　　日本 LD 学会　第 30 回大会（神奈川）
2022 年 2 月 27 日　　日本 LD 学会　第 5 回研究集会（熊本）

- 今後の研究予定

2021 年度は、春セメスター期間中にパイロットテストを、秋セメスター期間中に実践授業を行い、研究データを収集する。文献調査、関連学会・セミナー参加、メンバー間による勉強会を継続する。2021 年度春学期には、授業改善モデルに基づいたパイロットテストを行う。オンライン授業、対面授業、オンライン＋対面の混合授業において、試行可能な UDL デザインのプランを立てる。UDL を取り入れた授業と取り入れない授業でそれぞれの受講生の変化を観察・検証する。第 1 回目のパイロットテストは少人数で行う。秋セメスターにおける第 2 回目のパイロットテストを見据えて、第 1 回目のテストではより試行的な実践を目指す。学業達成と意欲の側面を中心に検証を行う。春学期に行ったパイロットテストは、夏休みにアンケート、インタビューをもとに効果検証、モデルの修正を行う。2021 年度秋学期には、修正したモデルに基づいた 2 回目のパイロットテストを行う。学内で実践報告のためのイベントを計画する。1 回生演習科目と言語科目の特質を踏まえ、それぞれの科目の学習目標と授業形態に適した UDL デザインを模索する。授業の構造だけではなく、授業の内容にも UDL を取り入れることによって、自立した「学びのエキスパート」を育てる初年次教育が実現できると考えられる。また、言語授業においては、技能的側面だけではなく、創造的思考や感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面における変化を観察していく必要がある。

2021/3	2021/4	2021/5	2021/6	2021/7
	勉強会			
パイロットテストの準備	春学期、パイロットテスト (授業改善モデル)			

2021/8	2021/9	2021/10	2021/11	2021/12
アンケート、ワークシート分析 モデルの修正		秋学期、実践授業 （修正した授業改善モデル）		
	日本特殊教育学会大会(つくば)			日本 LD 学会 (神奈川)

2022/1	2022/2	2022/3		2022 年末までに
秋学期、実践授業 （修正した授業改善モデル）	アンケート、ワークシート分析			論文投稿
学内報告会	英語教育 UDL 研究学会(関西)、日本 LD 学会研究集会(熊本)	英語教育 UDL 研究学会(関東)		

以上